

拡大してみえる事、伝える事の重要性

林智恵子
ネクスト・デンタル主任衛生士

抄録

私は顕微鏡を日常的に使い始めて4年目です。10年ほど前から、先生の顕微鏡治療のアシスタントとして拡大の世界は知っていました。衛生士業務の拡大処置としては2.5倍のルーペからスタートしました。やがてヘッドマウント式の4倍のルーペを使うようになり今まで見えていなかったものが見えるようになり、処置の結果が変わってくる事が体験できるようになりました。そして、4年前に私専用の顕微鏡を導入してもらった事になりました。当初はピントを合わせるだけで精一杯で、とてもずっと覗き続けるなんてできませんでした。すると先生から「一人の患者さんに最低一回は使いなさい。」と言われ、時間はかかりながらもなんとか使えるようになり、いつしか慣れてきて口腔内全体を観察することが出来るようになりました。

そして虫歯、歯周病のチェックの為に拡大視野で観察していくうちに、いろいろな事に疑問が湧いてきました。例えばプラークコントロールが出来ているのに、コンタクトカリエスになったり、いつまでも治らない歯肉炎、舌や頬粘膜の圧痕、クラック、色の悪い歯肉などなど。メンテナンスの始まりは口腔内の観察からはじまります。その時、顕微鏡を通して見て感じる事は「最近この患者さんは調子がいいな」とか「この患者さんはどこか体調が悪そうだ」とか、患者さんに質問して聞いてみると「最近、疲れやすい」とか「慢性の肩こりがある」など、いわゆる「未病」が見つかるのです。その未病と口腔内の観察を重ね合わせて考えていくうちに「歯を綺麗にするだけのクリーニング」から「歯を残す為に必要な事」を考えるようになりました。

これからの歯科衛生士はプラークコントロール、力のコントロール(OMT)、食事(栄養素)のコントロールを積極的に指導し、体の基本である血液の健康が必要であると感じるようになりました。

私が思う歯科衛生士の将来像とは、顕微鏡の使用により、拡大視野下で得られる口腔内の情報から全身へのケアに繋がる指導ができるようになり、より歯を残す事の重要性を患者さんに訴える事ができるようになる事ではないかと考えます。

私の顕微鏡使用の臨床例から皆さんにもこれからもっともっとトライしていただきたい事を伝えられると良いと思います。

略歴

- 1977年 3月 日本大学歯学部歯科衛生士専門学校卒 歯科衛生士免許取得
松本歯科医院に就職
- 1982年 3月 出産につき退職
- 2002年 2月 医療法人社団 友和会 太陽歯科勤務
- 2013年 1月 ネクスト・デンタル勤務
- 2016年 11月 株式会社ちっころ設立

日本顕微鏡歯科学会 認定歯科衛生士
日本医療機器学会 第2種滅菌技士
日本歯科審美学会 ホワイトニングコーディネーター
歯科臨床研鑽会 会員
TCH研究会 会員